

濟州島の4・3事件を調査背景は祭祀儀礼の調査から「東福里の新過祭」に参加した。その前に儒式の新年祭をみていた。韓国では今だに国や村の正式儀礼では儒式による男性主体の祭祀儀礼が執り行われている。同時に女性主体の巫式による村の祭祀がシンバン（濟州島では世襲シャーマン）により執り行われている。われわれは海女さん主体の巫式祭祀を見てきたので男性の参加がど見られない新年祭を不思議と思わず、「この村では別途儒式の新年祭」を何時やるのかと尋ねると、「この村では儒式の新年会はやらない」との返事が返ってきた。同時に4・3事件で男性がいなくなったので出来なくなった」。4・3事件で多くの成年男性が拘束されたり、殺されたり、村から逃げ出した、とのことであった。

この4・3事件が濟州島では全島に亘り大きな事件であった濟州島四・三事件（さいしゅうとうよんさんじけん）は、1948年4月3日に在朝鮮アメリカ陸軍司令部軍政庁支配下にある南朝鮮（現在の韓国）の濟州島で起こった島民の蜂起にともない、南朝鮮国防警備隊、韓国軍、韓国警察、朝鮮半島本土の右翼青年団などが1954年9月21日までの期間に引き起こした一連の島民虐殺事件を指す。韓国政府側は事件に南朝鮮労働党が関与しているとして、政府軍・警察による粛清をおこない、島民の5人に1人にあたる6万人が虐殺された[3]。また、濟州島の村々の70%が焼き尽くされた[3]。また、この事件は麗水順天の抗争の背景にもなった。（ウィキペディアより）

多くの島民は家族・親族・友人が関係する（連座制）ため、また長らく李承晩以降の反共軍事政権が続いたため公には語られてこなかった。韓国の民主化が進み、調査委員会による調査結果、濟州島4・3事件は国家の不当な犯罪であり、正式に国家の謝罪と不当に拘束殺害されたり有罪となった人々の名誉を回復し、国家による慰霊祭が催されるようになってきた。また正式調査報告書がなされ近く邦訳が出版される。濟州島での4・3事件慰霊祭が10日間ほど行われ、日本では大阪と東京でも今週行われる。

道具を創る

- チェジュドー民俗調査に参加して -

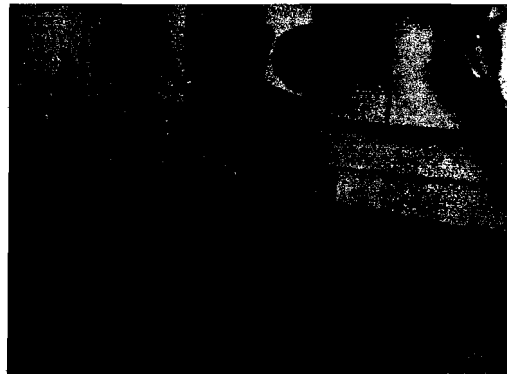
2008年3月チェジュドー（済州島）民俗調査チームに参加し、チェジュドー大学高教授（民俗学）の研究室を訪問した。高教授はチェジュドーの民具研究の第一人者で、大学内にある民具展示室には多くの漁業に関する道具が整理され展示されている。高教授の民具解説を聞きながら民具はその土地に特有の改良が為され発展していることが実感できた。

地域環境に合わせて最適な漁具が漁師の手によって作られる

例えば韓国は3方向海に囲まれているが日本海側は干満時の潮位差が70cmから1M、逆の黄海側は最大7Mもある。潮位の差異から高教授によれば韓国を取り巻く海は実は4つに区分され自ずと沿岸に生息する魚種や貝類の生息領域や産卵場所も異なる。それに海底の状態や潮の満ち引きに伴う魚の動きも異なってくる。沿岸の形状の差異から漁法も地域により異なり、潮の干満や潮流の速度などにより網や釣具など、また磯での若布や天草の採取道具、海女のサザエやあわびを採る鉤の形状など少なからぬ影響を及ぼす。其れに伴って漁具にも少しずつ工夫が施されていく。海面下の魚との戦いに勝つ為不断の工夫が求められ、漁具の改良工夫が出来るのは生業として漁業に携る地域の漁民になる。少しの道具の差異が大きく収穫の差異に直結する為である。このように少しずつ差異化が進みその地域で採用される漁具の形や材料や大きさは多様に異なる。その結果地域で使い続けられる道具として最適な漁具が漁師の手によって作り出される。



海底の泥の中に隠れている魚を獲る道具。
獲る環境に合わせて道具の先の形や長さが違う。



網や籠は地域にある植物を材料とするため、強さや
きめ細かさが異なる。同じ目的でも異なる形となる。

高教授の説明を聞きながら展示されている漁具を見ていくと道具が工夫された背景も見えてくる。この道具に秘められた人の智慧を聞きながら見学者が様々な視点からの疑問を高教授に投げかけるに従い自然と知的興奮を覚えてきて瞬く間に時間が過ぎていく。高教授は最後に「道具の改良が出来るのはその道具を使う人にしか出来ない。鍛冶屋が漁具を作り出すのではなく漁をしている人たちが道具をつくり出す」と言われた。技術進歩とはこのように改良やイノベーションが必要される人たちの不断の工夫の中から生まれてくるのであって自然に生まれてくるのではないとチェジュドー大学の民具展示を見ながら納得した。

民具の背後にある人の技術と知恵

民俗学ではフィールドワーク（実地調査）が重視される。道具を手に取り、実際の使用状況を観察し、作業で道具を使う人の話を聞く。また地域の道具を比較する。道具に施された技術の内容を通じて生業を担う人びとに蓄積された実際に役立つ技術（智慧）の検証を知らず知らずの内に行っている。また民俗学では博物館学という領域があります。この領域では博物館に民具を単に保管陳列するだけでなく見る人に民具の背後にある人の技術を見せ、智慧に気付かせることが中心になってきている。博物館での民具陳列のみでなく実際の生業現場のフィールドワークと相まって見えない技術と智慧を知ることができる。

（大橋克巳：㈱クラレ顧問）